J A D C I News

No. 33

2009. 7. 21

In This Issue

吉田会長再選・新役員紹介
平成 20 年度古田賞受賞者
第 20 回学術集会・総会の記録
2012 年 12th ISDCI congress 福岡開催決定
＊年会費改定＊

日本比較免疫学会

http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadci/index.html

日本比較免疫学会　役員（2008.9～2010.8）

会長：吉田　彪（臨床パストラルケア教育研修センター）
副会長：川畑俊一郎（九州大学）
庶務・会計：中尾実樹（九州大学）、補助役員　杣本智軌（九州大学）
学術集会担当：中村弘明（東京歯科大学）、橋本香保子（千葉工業大学）
英文抄録担当：飯島亮介（帝京大学）
ホームページ担当：広瀬裕一（琉球大学）
監査：和合治久（埼玉医科大学）、中西照幸（日本大学）

発行者：日本比較免疫学会長　吉田　彪
事務局：庶務担当　中尾実樹
住所　〒812-8581　福岡市東区箱崎 6-10-1
九州大学大学院農学研究院　水族生化学研究室内
事務局 e-mail: jadci2office@gmail.com
電話　092-642-2894（ダイアルイン）　FAX　092-542-2897
郵便振替　口座番号　01730-9-80586
加入者名　日本比較免疫学会

日本比較免疫学会会長の２期目に臨んで
――下克上の免疫学の勧め――

会長　吉田　彪

昨年度の総会で本学会役員の任期は９月開始にするということが決まりました。これは学会の一大事業である学術集会がこのところ８月に開催されることが定着したので、学会運営上など今までのような４月開始よりは便利だ、という理由からです。　そんなわけで、私が学会長に再選された後、２００８年９月１日から新役員体制が始まりました。　前期役員の中、友永進先生と山口惠一郎先生が退任され、中西照之先生と橋本香保子先生のお二人が新役員になられた以外は２年半前に発足したメンバーに留任して頂きました。　このことは既に今年度の総会でご報告し学会ホームページに掲載されている通りです。 そこでこの機会に、いわば２期目を迎えた会長以下各役員が本学会運営についてどのような考え方で臨んでいるか少し述べてみたいと思います。

２０年前の学会発足時のことを考えてみますと、既存の学会とは別に新しい学問のパラダイムに合った会を作りたいと思う方々によって、本学会は創設されたと考えられます。　創設に携わった方々が中心になって役員となり、その後の本学会の運営にあたられたわけです。　新しい学問領域へのシフトに情熱を傾けていたそれらの先輩諸先生の指導力と牽引力によって本学会は発展し成熟（成人）したと言って良いと思います。　しかしながら、何事でもそうであるように、「成熟」したということは褒め言葉であると共に、後は発展性のない、朽ちるだけの運命にあるという、希望のない見方にも繋がりかねません。

２年半前に初めて会長に選ばれました時にも述べましたが、本学会はこのような成熟期に入っていると思います。　創設期のような熱気あふれ活気に満ちた学会にするにはどうしたら良いか、という重大な課題を前にして私ども役員の第１期は始まったわけです。　その後、活性化委員会からの報告もされました。　しかしながら、この大きなテーマに対する取り組みはまだ始まったばかりです。言うまでもなく、第２期に入った我々役員会が引き続き取り組まなくてはならない課題です。

学会の活性化については、今までも何度かこのニュースレターの紙面やその他の機会をとらえて私の考え方を述べてきたつもりですが、第２期に入るにあたり改めて申し上げたいと思います。　まず、私の考え方の基本は、「学会」の活性はその拠って立つ「学問」の活力によるものだ、ということです。　従って、本学会の活性化は「比較免疫学」領域の学問・研究のエネルギーに依存す

るという当たり前な見方です。　本学会の活性化を「役員会」の課題とする、という時、役員たちは何をすればよいのでしょうか。　学会役員の仕事は学会の運営です。　活性化を運営上の問題として捉えるのなら、一部で提案されていたように学会費を値下げして入会を勧誘する、というようなことしか考えられないかもしれません。　でもそのようなことで入会してくる会員数を増やしたところで、学会の活性化になるでしょうか。　私は疑問に思います。そうではなくて、「比較免疫学」の面白さや奥深さを自ら示していくのでなければならないと思います。　比較免疫学研究のリーダーとならなくてはならないでしょう。　ですから、活性化を単に学会運営上の問題として捉えるなら、せいぜいできることは、現在本学会に属していないで興味深い比較免疫学研究をしている研究者を一人でも多く見つけて入会を勧誘することくらいでしょう。　「比較免疫学」の活力を見るならば、２０年前と比べて勝るとも劣らないポテンシャルを持っていると私は見ています。　なぜなら、今までは主として哺乳動物での免疫機構が下等動物ではどうなっているかという、いわば上から下への比較でした。　これからは「下から上へ」の比較免疫学だと思います。　下等動物特有と思われる免疫機構がどう哺乳動物で働いているのか働いていないのか、という問題です。　素人臭く言えば、今や「比較免疫学」は宝の山だと思います。　そうです、本学会の拠って立つ学問はまだ発掘されないエネルギーに溢れていると信じます。

こういうわけで、本学会の活性化は役員会の課題というよりは会員一人一人の課題です。　役員として責任逃れで申し上げているのではありません。上述のように「活性化」は学会運営上の問題ではありません。　比較免疫学の問題です。　しかしながら、会員一人一人が比較免疫学の宝の山を掘り起こすように、学会が出来るだけのお手伝いをする為に運営上何が出来るかを役員会としても熟慮し実行して行きたいと思います。　例えば、学術集会のあり方の再検討、情報交換のための小グループディスカッションやワークショップ、ミニシンポジウムなどの適時開催やその支援、3 学会合同シンポジウムなどの他学会との協調事業の推進など、様々なことが考えられると思います。　どうか会員の皆様、この様な活動に対するアイデアをどんどん学会事務局や私宛に提案してください。　これからの新しい 20 年が働き盛りの「学会」となる為に、比較免疫学研究にパラダイムシフトを起こすような研究活動を期待しています。

ＪＡＤＣＩ役員紹介（2008～2010 年）

会長：吉田　彪
（臨床パストラルケア教育研修センター）

副会長：川畑俊一郎
（九州大学）

庶務・会計：中尾実樹（九州大学）＆

補助役員　杣本智軌（九州大学）

学術集会：中村弘明（東京歯科大学）＆

橋本香保子（千葉工業大学）

英文抄録：飯島亮介（帝京大学）

ホームページ：広瀬裕一（琉球大学）

監査：和合治久（埼玉医科大学）　＆

中西照幸（日本大学）

---- 役員挨拶 ----

９年目の学術集会担当役員

中村弘明（東京歯科大学生物学研究室）

プログラム役員（学術集会担当役員）をお引き受けしてから、今年で９年目になります。初めの２年間は小林睦生先生（感染研）の補佐といった役回りでしたが、３年目からは小林先生が抜けてしまったため、その仕事をほぼ一手に引き受けることになりました。

学術集会担当役員の主な仕事の一つに、講演要旨集の作成があります。目次や索引が一番時間のかかるところですが、その他、表紙から奥付までの全てのページ（講演要旨は著者からの送付原稿を使用）を写植原稿にして印刷会社に渡します。作成に先立って、講演の順序・セッション分け、座長の選定などを行う“プログラム委員会”でも、中心的役割を果たします。そこでは学術集会の会長や他の役員の意見を取りまとめることもします。

本来、このような仕事（特に、講演要旨を取りまとめて要旨集を作成する仕事）は、学術集会を担当する集会長や集会事務局の方が中心となって取り仕切るのが良いと思うのですが、それを学術集会担当役員が行うことになったのは、この学会の発足時（当時研究会）の事情が関係しています。

第１回から第３回までの学術集会は、学会事務局（獨協医大 第２解剖）が学術集会を開催していました。事務局では、年会費の管理、会員名簿の作成、News の発行などに加えて、学術集会の開催（会場設定から懇親会他 etc.）が加わって、かなりの負担となっていましたので、初代のプログラム役員だった和合先生が、講演要旨集の編集をかってでてくれたのでした。第４回からの集会は、学会事務局を離れての開催となったのですが、要旨集の作成については、引き続きプログラム役員の和合先生が担当してくださり、その形が現在まで続いているという訳です。

講演要旨集は、古田奨励賞の選考に関連する重要な印刷物となりましたので、その辺の事も充分考慮に入れた上で、その作成を集会事務局に移行し、出来るだけ学術集会長・集会事務局の意向が反映されるようになったら良いと思っています。今回、引き続き学術集会役員を努めさせていただくことになりましたが、２年後に次期役員の方にバトンタッチをすることも踏まえて、学術集会担当役員の仕事の内容・範囲を検討する時期に来ているのではないかと思っている次第です。

そのようなことを思いつつ、これから２年、しっかり努めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

戦　略　的

庶務・会計　　中尾実樹（九大院農）

現在の大学や研究所では、組織の運営、科学研究の立案・実行、教育プログラムのデザインなどが遍く「戦略的」であるべきなようです。そもそも戦略とは戦争用語だったと思いますので、個人的にはかなり違和感というか、いかがわしさをを感じる言葉です。ただし、今や戦略とは「長期的視野、複合思考で特定の目標を達成するために力や資源を総合的に運用する技術・科学である。」とより一般的に定義できるようです。（Wikipedia より。ここでも私は複合思考という言葉をすんなり飲み込めないままですが…）

さて、私の比較免疫学研究（主に魚類の補体系の解明）はとても戦略的に進められてきたとは言えず、うろうろと行き当たりばったりに歩き回り、たまたま出会ったおもしろいことにのめり込んだまま、という状況です。もう少し長期的な視野で研究をデザインし、もっと無駄を排して遂行すれば良かったと自分でも後悔することがありますが、やはり興味任せであることの快感には抗しがたいのが正直なところです。

一方、学会運営はやはり「戦略的」であるべきでしょう。構成員の方々の利便と発展に資するべく、短期・長期の両方の視野を持ちつつ、総合的な最適解を求める必要があります。JADCI には、そのための分析と行動がますます重要です。もちろん JADCI は会員が「おもしろいこと」を語り合う場を提供するという基本的な役割りを忘れてはいけないでしょう。では JADCI と私の関係はどうか、と自問するとお恥ずかしいことばかりです。私の中にある「空回り感」を解消して、ひとかきひとかきをちゃんと推進力にするにはどうすればいいかを考えながら、この任期（2010 年夏まで）を泳ぎたいと思います。

当面は、国際学会(International Society of Developmental and Comparative Immunology＝ISDCI)との関係を考えたいと思います。そもそも JADCI は、ISDCI の日本開催を目指す国内母体としての意味合いもあったと伺っています。現在は JADCI と ISDCI はほとんど独立した存在ですが、たとえば ISDCI との関係を強化することによって、特に若い方々が世界に羽ばたいていくための窓口の一つとして、JADCI が果たすことのできる役割りがあるのではないかと考えております。メンバーシップの共有などがすぐにメリットのある話しとして成立するかはわかりませんが、ISDCI が世界各国の国内 DCI コミュニティーともっと密接な関係を築きたいと考えていることは確かです。Win-Win な協調関係を探っていきたいものです。

抄録委員就任のご挨拶

飯島亮介（帝京大学薬学部　医療生命化学教室）

日本比較免疫学会の抄録委員の任を拝命するにあたり、何か書きなさいとの事ですので、ここに紙面をお借りします。抄録委員は友永進先生、田中邦男先生、山崎正利先生に続いての４代目で、私自身としては２期目になります。主たる業務はDevelopmental and Comparative Immunology 誌へのカンファレンスリポート掲載にあたっての諸事務です。覚えている方もおられるかと思いますが、大分以前はproceedingsとして掲載してもらっていたものが、諸般の事情で現在のリポート形式にかわったものです。稚拙な職務執行によりご迷惑をお掛けする事もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私が日本比較免疫学会に初めて参加したのは友永先生が秋吉台グランドホテルで主催された第４回学術集会でした。それまでは生化学会や薬学会といった“普通の”学会にしか参加した事がありませんでしたので、初めて参加した学術集会は驚嘆すべきものでした。すなわちホテルに缶詰しかも事務局手配による強制相部屋宿泊（私の場合は岩永貞昭先生、名取俊二先生、山崎正利先生と相部屋になりました。寝られませんでした。）、しかも連夜どんちゃん騒ぎ（普通の宴会ではなくどんちゃん騒ぎです。他の宿泊団体からうるさいとクレームがついたそうですから、この表現に間違いはないと思います。）、なのに朝からしっかり活発に討議している。この学会は何だろうと思いました。聞くところによれば、最初期には更に熱く活発な宴会と討論が行われていたのだそうです。研究領域の近い研究者が小規模で集まる事にはこう言う意味があるのかと思った次第です。スケールメリットならぬスモールスケールメリットと言えるようなものを感じました。

日本比較免疫学会は、今年で学術集会が第 20 回を数えるまでになりましたが、近年新規加入者が少なく、また定着しない事、類似の学会（重複会員も多い）が存在する中での本学会の存在意義など考えなくてはいけない事が山積し、学会活性化の方向性の模索が行われています。ところで、そもそも活性化された学会のイメージとは一体どのようなものなのでしょうか。上に挙げたような問題が解決する、またこれが最も重要なのだと思いますが、学術集会における一般演題発表や質疑応答が一層充実する事が役員会の共通認識となっています。そうしますとあれこれ考えるまでもなく、話に聞く初期学会の姿、それこそが活性度の高い学会の姿だと言えるのかも知れません。ただし以前の当学会に内輪の仲良しサークル的な性格を感じられた方もあり、これが学会の新陳代謝を損ねた要因でもあったかと思います。決して大きな学会ではない日本比較免疫学会が

活気を持って存続するためのヒントは、この辺のバランスをいかにとるかにあるような気がしています。他の役員も活性化について触れられていると思いますが、役員会だけでは考え至らぬ点も多々あるかと存じます。会員の皆様にご意見をお寄せいただければと思う次第です。

ホームページ委員

広瀬裕一　（琉球大学理学部海洋自然科学科）

学会ホームページの管理者を、立ち上げの 2001 年より担当しております。もともとはホヤ群体間のアロ認識や、ホヤの外被組織（被嚢）の生体防御機能などを研究課題としてきました。1997 年に琉球大学へ異動して、研究環境と立地を活かす必要性から、藻類と共生する群体ホヤの種分類や共生機構の多様性と進化を研究するようになり、「比較免疫学」のキーワードからやや逸れつつあります。もっとも、広義の共生には寄生関係も含まれ、共生（寄生）者−宿主間には、何らかの認識がともなわれるはずなので、あながち遠く離れた所に立っている訳ではないと思っております。

ホームページをうまく活用することで、学会事務の省力と経費節減が期待されております。学術集会の日程をうっかり忘れても、講演申し込みの様式をなくしても、ワンクリックで確認やダウンロードが（もちろん無料で）できるようになってきました。その一方、個人情報の保護など、注意すべきことも増加しているご時世ではありますが、種々ご理解の上、会員の皆さんの積極的なご利用をお願い致します。学協会情報発信サービス（国立情報学研究所）のサーバを利用してためいろいろ制限もありますが、運用についてのご要望・ご提案がございましたら、可能な範囲で対応したいと思いますので、学会事務局または私にご連絡下さい。また、継続的な管理・運用には個人担当では限界がありますので、本学会 web site の運用にご協力いただける、（特に若手の）会員がいらっしゃいましたらお知らせ下さい。

日本比較免疫学会　古田賞を受賞して

比較免疫学の面白さをいかに発信するか

九州大学大学院理学研究院　生物科学部門　川畑俊一郎

比較免疫学会は、今年で創立 20 周年を迎え、また、思いもよらず本年度の古田賞をいただき、たいへん恐縮しております。本学会の学会員としてさらに努力せよとのお達しと心得て、本分野の教育研究に微力を尽くすべく気持ちを新たにしております。

私が大学で仕事として研究を初めてから、特に研究グループの責任者になってから、学会発表や論文発表の際に常々心がけていることがあります。それは、広く認識されているモデル動物（マウス、ショウジョウバエ、線虫、シロイヌナズナなど）とは異なった生物を材料にした研究成果を、いかに他分野の研究者に興味を持ってもらえるようにするかを工夫することです。つまり、生きた化石と呼ばれる特殊な動物に対する偏見の呪縛を解くことにほかなりません。タンパク質や酵素の挙動を対象にすることで、外部形態から醸し出される特殊性を薄めるとともに、種を越えたタンパク質の構造機能の解明により、生命現象に内包される普遍性を垣間みたような気にさせるのです。けっして、特殊な生物だけの生命現象と思われないようにすることが肝心です。

例えば、カブトガニの体液凝固カスケードに関わるプロテアーゼ群は、ショウジョウバエの背腹軸の形態形成にかかわるプロテアーゼ群と相同であり、哺乳類の血液凝固もセリンプロテアーゼのカスケードを利用していることを知れば、興味を示さない研究者の数は激減すると思われます。本来、科学は比較することが原則基本ですので、綿密に計画されて得られた比較免疫学の研究成果が面白く無いはずはありません。分類学的に大きくはなれた生物現象を比較することで、新たな事実や概念が必ず見つかることを確信しています。

古田奨励賞を受賞して

ショウジョウバエ PGRP-LE の細胞内認識依存的なオートファジー誘導によるリステリア菌の増殖抑制

東北大学大学院薬学研究科・生命機能解析学分野
矢野　環

この度は、日本比較免疫学会古田奨励賞をいただきまして、学会長、選考委員の先生方、会員の皆様、そして何より激励のお言葉をくださいました古田恵美子先生に心より御礼申し上げます。第２０回という記念すべき大会でいただけた幸運を感謝しております。

本大会では、シンポジウムが「マクロファージ～生体防御の主役～」という題で開催され、様々な動物のマクロファージを研究なさっておられる第一線の先生方の講演を聞く機会に恵まれ、生物が自らの生活環境に対応するために生体防御機構を多様に適応させている様を感じ取ることができました。それと同時に、比較免疫という分類上多岐にわたる生物種の免疫を比較し、普遍性と特化性を抽出する作業のためには、個々の生物、事例を詳細に知ることの重要性を感じることができ、大変勉強になりました。

私は、これまでショウジョウバエをモデル生物として用いて、自然免疫における異物認識と自然免疫応答について研究を行ってまいりました。生物の歴史は病原体との戦いの歴史、といっても過言ではありませんが、この宿主と病原体の攻防こそが多様な生体防御機構を生んできたといえます。今回発表させていただいた研究は、細胞内寄生細菌という、宿主の体液性免疫を逃れるために宿主の免疫細胞の貪食作用を利用してその細胞内に入り込み増殖する細菌の戦略に対抗して、宿主がどのように戦っているのか、ということの解明を目指したものです。原核生物である細菌はゲノムのサイズ、増殖の速度などから、宿主である真核細胞生物と比較して感染の戦略を変化させるスピードが早く、そのような不利を背負った宿主がとり得る手段を探ること、さらに、自らの内部に侵入した異物をどのように排除するのかを、ヒトなどのほ乳類からショウジョウバエにいたる動物種に感染する細胞内寄生細菌リステリア菌を用いて検討しました。

結果として、ショウジョウバエ細胞内に侵入したリステリア菌は、オートファジーという宿主が元来有するタンパク質や細胞内小器官の分解系によって排除されること、そして、オートファジーは宿主細胞内に存在する異物認識分子 PGRP-LE によるリステリア菌の認識依存的に誘導されることを見いだしました。宿主が、自らの細胞のために発達させてきたオートファジーという分解機構を異物除去に転用し、しかも、自らの不要な分解をさけるために、異物の認識に応じて異物の周辺に空間的に限局した誘導を起こす様は、観察していて大変美しいものです。今後も、病原体に対抗する宿主の知恵を明らかにし、研究分野に貢献できたらと考えております。

最後に、本研究をここまで進めることのできましたのは、倉田祥一朗教授のご指導と、研究室の仲間の支えあってのことと感じております。この場を借りて、深く御礼申し上げます。

日本比較免疫学会第 21 回学術集会の開催にあたって

第 21 回学術集会長
中西照幸（日本大学）

この度、第 21 回学術集会を藤沢キャンパスにてお世話をさせていただくことになりました。本学会の前身の比較免疫学研究会より前の比較免疫学シンポジウムと言われていた頃より 20 年余り学会とはつかず離れずにきましたが、平成 18 年度に古田賞をいただいた時点で、ただ参加するだけでは済まされない、いよいよ「年貢の納め時」と覚悟をしておりました。とにかく、微力ながら集会の成功に向けて全力を尽くしたいと思います。

1993 年に和気先生を集会長にした第 5 回学術集会が開催されて以来 16 年ぶりになります。当時に比べますと、駅（六会日大前）やキャンパスが大きく様変わりしており、昔参加された方はたいへん驚かれることと思います。本年の開催は、都合により 8 月上旬（8 月 3 日～5 日）となりました。1 年中で一番暑い時期ですので、建物の外に出なくとも済むように、講演、ポスター、懇親会等はすべて同じ建物の中で実施できるようにいたしました。

本年度のシンポジウム（5 日午前中）のテーマは、「リンパ球の起源と分化」と題して、造血幹細胞研究も含め、系統発生及び個体発生の両面からリンパ球の起源と分化について討議したいと考えています。演者には、最近 Nature 誌上で注目を集めた二人の研究者、“魚類 B リンパ球が貪食活性を示す”ことを明らかにしたペンシルバニア大学 Dr. Oriol Sunyer や“T リンパ球の兄弟は B リンパ球ではなく食細胞”であることをクローナルアッセイにより証明し、血液/免疫細胞分化の研究において従来の学説を覆す新しい学説を提唱した理化学研究所 河本宏先生が確定しています。その他、両生類及び魚類の造血幹細胞研究の演者も決まっています。

リンパ球のサブセット特に、CD4 陽性 T 細胞については、Th1, Th2 細胞に加えて Th17 細胞などのヘルパーT 細胞や胸腺で分化する Treg に加えて Th3 細胞や Tr1 細胞などの制御性 T 細胞の新たなサブセットの報告が相次いでいます。このように、リンパ球、特に T 細胞については抗原やサイトカインの刺激により、特定の細胞表面抗原受容体を発現し特定の機能を持つ数多くのサブセットが存在し、複雑なネットワークを形成して免疫応答を制御しています。このような多様な T 細胞サブセットの存在意義や免疫システムの複雑なネットワーク形成について統一的な理解を得るには、その起源に遡って追及する必要があり、系統発生的及び個体発生的アプローチは、この分野に新たな視点を提供し大きく貢献すると信じています。小さな学会ですが、小川の一筋の流れが大洋の大

きなうねりとなるように、暑さを忘れる熱い論議で盛り上げたいと思っています。
当藤沢キャンパスは、東京駅、羽田空港から 1 時間 10 分、新横浜駅から 1 時間足らずです。お気軽にご参加ください。第 20 回学術集会記念誌「飛翔」によれば、第 5 回学術集会には 28 題の演題が集まったことになっています。第 21 回学術集会には同じぐらいの演題が集まることを期待しています。よろしくお願いいたします。

第 5 回学術集会（1993 年、日大）でのスナップショット。特別講演講師として、大野　乾先生（上写真左端）を招へい。また、シンポジストとして R.L.Raison 博士（下写真前列右から二人目）がオーストラリアから参加された。

いのち（生命）

比較免疫学研究所　古田恵美子

第 20 回学術集会記念大会が、平成20年8月25日から 27 日までの 3 日間、吉田彪先生を大会委員長として東京医科歯科大学で開催され、深い感動をもって終了いたしました。本年は、学会会長選挙も行なわれ、吉田彪先生が再任され9月から新役員人事で又心あらたに学会活動が、開始されました。学会会員一人一人の活動が期待されるところです。

さて、本大会に先立つ平成20年 3 月1日（土曜日）のことでした。朝日新聞全国版の科学記事の欄に「海の幸おいしく学ぶ」の大見出しと副題「不思議感じて」のタイトルで面白そうな記事が載っていました。子供を混ぜた実験室での一般市民の写真が大きく出ていて、実験者の顔を見ました途端「アレッ！」と私は思わず大声をあげていました。なんと！秋田大学准教授石井照久先生ではありませんか！秋田県の大学や短大で作る「大学コンソーシアムあきた」の主催で「ふだん食べているものがどんな生き方をしているかを知り、食の安全や生命の不思議を感じてもらいたい」と市民を対象としたユニークな無料の生物学講座の記事でした。第1回目はホヤ、体のつくりなどを学んだ後、バターいためや酒蒸しにして食べ、2回目「シラスとはまぐりーー海洋生態系を知るーー」最終回（第 3 回）は、3 月 14 日「イカーー背骨のない動物」。

私は、この記事を読んだ直後、石井先生にメールでお祝いの言葉を送りました。ついでに「イカを切ったときに流れる血液」についても是非話して欲しいとお願いの言葉を書き添えました。数日後、今度は「天声人語」にも石井照久先生のユニークな講座について書かれていて、私はまた「おめでとう！素晴らしい感動を頂きました。」とメールいたしました。

最終講座（3 月 14 日）の日の午後、石井先生から返信を頂きました。

「新聞を読んで下さり、またメールを下さり有り難うございます。先生からのお知らせ嬉しいかぎりです。今日、3回目の講座はイカですが、新鮮なヤリイカを入手してもらいました。講座は18：30からです。切ったら流れる血液のこと、酸化すると青くなること、鰓心臓を含めると心臓が3つもあることなどお話して参ります。」と。なんと嬉しい返信だったでしょうか！

今年ほど食の安全が騒がれた事がありましたでしょうか？我々は、余りにも無頓着に食物を口にしていたのではないでしょうか？我々の食物として如何に多くの生命が失われているかを知る良い講座だったと思っています。少なくとも石井先生の市民講座は、「海洋生物のいのちをたべている」事を人々に知らしめたと信じています。

時を同じくして、私の身近の男性（52 歳）が、難病（病名も原因も分からない）で、壮絶な病との戦いをしていました。海外旅行から帰った直後から、顔や背中に多くのできものが発生しあまりの酷さに皮膚科を受診、「横紋筋融解症」の診断をうけました。横紋筋が崩れて行く病です。およそ 10 日後更に「間質性肺炎」が発症、「膠原病の疑い」で T 女子医大に入院、免疫抑制

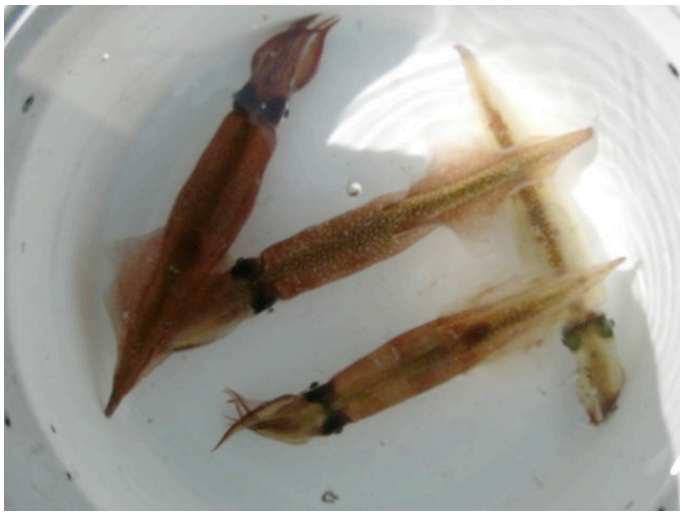
剤多量投与も空しく最初の発症からわずか一月、帰らぬ人となりました。壮絶な病との戦いの末失われたいのち。愛する人を失った遺族のかなしみを目の辺りにしました。

そして、その頃身重だったご近所の女性が幸せな出産をしていました。

食物として食べられるいのち、病のはてに失われたいのち、新しく生まれ出るいのち。いずれも大切な、重いいのちです。

連綿たる命の不思議、命の重さ、そしていのちのはかなさをつくづく感じたひと月でした。

全ての、大学での仕事を終えた時から「いのち」と向かい合う事柄に関わってきました。「いのち（生命）」に敏感になっているこの頃です。



日本比較免疫学会古田賞

平成１８年度から、日本比較免疫学会賞として古田賞および古田奨励賞が制定されています。平成 21 年度の古田賞は倉田祥一朗先生（東北大学大学院薬学研究科）に授与されることが決まりました。第 21 回学術集会において表彰式および受賞講演が行われます。なお、古田奨励賞は、学術集会の一般演題の最優秀講演として選出される予定です。第 1 回からの受賞者および授与規定は以下に示します。今後とも、自薦他薦を問わず、多くの会員の方々にご応募頂きますようお願い申し上げます。募集要項・応募締切などの詳細は随時ホームページに掲載されます。推薦書（大賞）の様式も JADCI ホームページからダウンロードできます。

第 1 回（H18 年度）

古田賞　中西照幸（日本大学生物資源科学部）

「魚類の細胞性免疫および免疫関連分子の機能解明」

奨励賞　木村鮎子（東京大学大学院理学系研究科）

「肝臓 EST 解析による無顎脊椎動物ヤツメウナギ補体系遺伝子の網羅的単離」

第 2 回（H19 年度）

古田賞　笠原正典（北海道大学大学院医学研究科）

「免疫系の起源と進化に関する研究」

奨励賞　松田泰幸（九州大学大学院理学府）

「カブトガニ外皮タンパク質カラキシンは、創傷部位において
トランスグルタミナーゼによって架橋され、網目状繊維を形成する」

第 3 回（H20 年度）

古田賞　川畑俊一郎（九州大学大学院理学研究院）

「節足動物の自然免疫に関わるタンパク質の構造機能研究」

奨励賞　矢野　環（東北大学大学院薬学研究科）

「ショウジョウバエ PGRP-LE の細胞内認識依存的なオートファジー誘導による
リステリア菌の増殖抑制」

第 4 回（H21 年度）

古田賞　倉田祥一朗（東北大学大学院薬学研究科）

「自然免疫機構におけるパターン認識およびオートファジーによる細胞内
細菌制御の分子遺伝学的解析」

日本比較免疫学会賞 授与規定

（平成 20 年度から適用）

１．賞の種類

日本比較免疫学会における賞は、古田賞および古田奨励賞の２種とする。

２．賞の性格

古田賞：学術研究上特に優れた業績を上げ比較免疫学の発展に寄与した研究に対して授与する。過去５年間程の論文に基づき選考し、その成果（あるいはその一部）が本学会の学術集会で発表されたものを対象とする。授賞式は総会時に行い、受賞者は原則として当年学術集会で受賞講演を行う。

古田奨励賞：本奨励賞は自薦他薦によるものではなく、当年の**学術集会における一般演題の発表から**優秀なものを選考し、学術集会において表彰する。

３．受賞者の資格

１）受賞時に１年以上の会員経歴を有する会員を対象とする。

２）古田賞、古田奨励賞ともに受賞者は年齢を問わない。

３）一般演題の発表申し込み時に、古田奨励賞への応募の有無を明記する。応募者は、一般演題の筆頭著者として発表する者であること

４．受賞件数

原則として古田賞および古田奨励賞それぞれ年１件以内とする。ただし、これらの賞にふさわしいと思われる該当者が無い年には受賞者なしとする。

５．選考方法

古田賞および古田奨励賞の選考は、別途定める学会賞選考委員会が行う。選考方法の詳細は、学会賞選考委員会が起案し、役員会の了承を得て決定する。

日本比較免疫学会　第 20 回総会　議事録

日時：平成２０年８月２５日　13：00～13：45

場所：東京医科歯科大学 1 号館 9 階講堂

議長選出：吉田彪　会長

第２０回学術集会会長の挨拶：吉田　彪　学術集会会長

一般演題 20 題に加え、内藤眞先生の特別講演、比較 3 学会合同シンポジウム、比較免疫学会シンポジウム「マクロファージ―生体防御の主役―」が予定されている。20 周年記念にふさわしい集会にしたい旨の挨拶がなされた。

報告事項

（１）会務報告（庶務・会計：中尾実樹）

１）ニュース発行（H19 年４月以降）

第３１号（H19.5.22）：PDF ファイルを電子メール配信（一部印刷体も有）

第３２号（H20.3.11）：PDF ファイルを電子メール配信（一部印刷体も有）

２）名簿の整理と発行

H20 年 7 月 1 日現在の会員名簿を発行した。会費の長期未納会員の整理は H18 年 10 月以来行っていないので、20 年度～21 年度のうちに行う予定。

３）会長選挙の結果

H20.3.27　公示、投票要旨を発送

H20.4.21　郵送による投票締め切り

H20.4.28　開票（中尾、川畑、杣本の立会い）

H20.5.2　結果を会員に配信

吉田彪現会長が再選。

吉田彪会長により、新役員の委嘱が行なわれた。

（２）次期第２１回学術集会開催について（中西照幸　学術集会会長）

場所：日本大学生物資源科学科（藤沢市）

会期：8 月３日（月）～５日（水）

懇親会場、招待講演・シンポジウム：未定

第 5 回集会に続いて 2 回目の会場となるが、その後建物などの改築などいろいろ変化していると思う。よろしくお願いいたします、との挨拶があった。

（３）次次期開催について（九大・理学部：川畑俊一郎）

九大・理学部（福岡市）での開催を予定している旨の説明があった。

（４）ＤＣＩ誌掲載の Conference Report（抄録委員：飯島亮介）

第１９回学術集会のミーティングレポートが、Developmental and Comparative Immunology (2008) 32: 1248-1251 に掲載された。別刷りの無償配布はなく、その代わりに PDF として配信された。

審議事項

（１）Ｈ１９年度決算報告（庶務・会計：中尾実樹）

平成 19 年度の会計決算の報告がなされた［総収入：1,430,043 円（前年度繰越金 1,128.754 円を含む)、総支出：608,660 円、次年度への繰越金 821,383 円］。

大きな支出は、要旨集･ポスターの印刷費、通信費と学術集会への補助金（10 万円）・比較３学会シンポジストへの謝礼、旅費等であった。

監査は、友永進会計監査･和合治久会計監査が行った。

（２）Ｈ１９年度会計監査報告（会計監査：友永　進）

友永進会計監査、和合治久会計監査が監査を行った結果、収支ともに適正であり関係書類も完備されていた旨の報告がなされ、総会出席者により拍手を持って承認された。

（３）Ｈ２０年度予算案（庶務・会計：中尾実樹）

平成 20 年度の予算案の説明があり、総会出席者により拍手を持って承認された。

（４）会計年度について（庶務・会計：中尾実樹）

昨年の総会で、会長および役員の任期は 9 月から翌翌年の 8 月までの 2 年間とすることが決定されたが､会計年度については従来どおり４月から翌年の３月までとしていることについての説明がなされた。

（５）学会活性化に向けたアクションプラン

１）学術集会での発表者の資格制限緩和

学部学生・大学院修士課程学生は、非会員でも筆頭著者として学術集会で発表できることとする。

２）「古田奨励賞」の選考基準の変更について

①一般講演の筆頭発表者に授与する。年齢および会員歴は不問。

②上記１）の場合は筆頭発表者は非会員でも授賞対象と成りうる。

③提出された講演要旨と口頭発表の両者を加味して選考する。

３）従来、提出を求めていた「英文抄録」は、その提出を廃止する。

（６）会費の値上げについて

ここ数年、繰越金減少の事態が続いている。学術集会への補助・シンポジストへの謝礼・旅費補助などの支出が原因となっているが、この際、発足時から 3,000 円であった会費を値上げしてはどうかといった案が、役員会で提出された旨の説明がなされ、その案のとおり拍手を持って承認された。

【学会費の変更】一般会員：3,000 円→5,000 円

学生会員：3,000 円（博士課程以上の学生を学生会員とする）

（事務局注）周知期間の必要性から、H22 年度から一般会員の値上げを実施することとし、さらに値上げ幅を圧縮できる可能性についても 22 年度までにさらに検討することとした。

＊The 12th Congress of International Society of Developmental and Comparative Immunology (ISDCI)の開催地が、先の 11th ISDCI congress (Prague, Czech, June 28-July 4)において、2012 年 7 月に福岡で開催(代表者　中尾実樹）されることが決まりました。これから Local Organizing Committee を正式に組織して準備を進める予定です。JADCI の皆様のご協力・ご参加をお願い申し上げます。

なお、Prague での 11th ISDCI congress のプログラムやスナップ写真は下記の Web ページでご覧になれます。

--Program

http://www.congressprague.cz/en/kongresy/isdci2009/odborny-program.html

--Photo gallery

http://www.congressprague.cz/en/kongresy/isdci2009/fotogalerie.html

--ISDCI home

http://www.isdci.org/

事務局より

今後さらに JADCI ホームページを活用したいと考えております。ホームページに対するご意見をお寄せください。

＊ＪＡＤＣＩ　Ｎｅｗｓの表紙およびページデザイン募集

Ｎｅｗｓの表紙デザイン案、および表紙を飾る写真・イラストを募集致します。また、News のページデザイン案も募集します。JADCI 会員の情報交換の媒体にふさわしい、美しい News の作成にご協力いただけますよう、お願い申し上げます。

＊所属・住所が変わったら至急ご連絡を！

News 等の送付に宅配メール便を利用しております。転送ができませんので、宛先となる所属や住所に変更が生じた場合には、学会事務局まで至急ご連絡ください。e-mail か Fax でお願いいたします。書式は特にありませんが、下記の情報をいただけますと助かります。

氏名、住所、所属、電話／FAX 番号、メールアドレス

＊News への寄稿を募集しております。

エッセイ、学会参加記、JADCI へのご意見・ご提言などをお待ちいたします。庶務担当中尾までお寄せ下さい。また、News を充実させるため、その構成や編集についてのご意見も歓迎いたします。
様式／書式につきましては、事務局までメールでお問い合わせください。

＊新会員の入会を歓迎いたします。

会員の皆様のお近くに、比較免疫学にご興味の方がおられましたら、本学会への入会をぜひともお薦めいただけますようお願い申し上げます。入会の手続きにつきましては、次ページの案内をご覧下さい。

JADCI 入会手続きのご案内

電子メールで下記の情報を事務局までお知らせ下さい。折り返し、年会費の振替用紙を郵送いたします。

メールアドレス　jadci2office@gmail.com

１．氏名
２．氏名（ローマ字）
３．所属
４．連絡先（所属先あるいは自宅かを明記して下さい。）
　　郵便番号・住所・電話／FAX 番号
５．e-mai address
６．専門分野